

■令和7年9月定例記者会見

日時：令和7年8月27日(水)午後3時～4時

場所：吹田市役所高層棟4階特別会議室

【9月定例会等に関する質疑応答】

吹田市広報課

それでは記者の皆様からご質問をお受けしたいと存じます。

まずは先ほどご説明いたしました予算案件及びPR案件につきまして、ご質問をお願いいたします。

なお、ご発言の際には挙手をいただき、社名をお願いいたします。

どうぞよろしくお願ひいたします。

記者

訓練についてなんんですけど、多くの機関が参加するということをおっしゃいましたけど、実際に参加されるのは何機関ですか。

吹田市危機管理室

実際に参加される機関につきましては、現時点で、23団体です。

記者

これまでこういう有事モードの訓練っていうのは、吹田市でも初めてになるんですか。

吹田市危機管理室

昨年度に1回実施しております、それをブラッシュアップしてさらに高めたものとなっております。

記者

昨年度は何機関の参加だったんですか。

吹田市危機管理室

すいません、昨年度につきましては人数・機関名までは把握できていないんですが、40名以上の方が参加されております。

記者

今回の参加人数は。

吹田市危機管理室

56人です。現時点です。

記者

56人っていうのは、参加人数としては多いんですか。

吹田市危機管理室

多いと思います。他では多分ないと思います。

他の機関からこちらに来ていただく人数が56人となっております。

全職員が対象となっている訓練になっておりますので、相当な人数が訓練に参加、数百人規模の訓練となっております。

記者

市の職員さんは何名ぐらいの参加になるんですか。

吹田市危機管理室

今ちょっと集計を行っているところでありますけれども、数百人は超えているところになります。

記者

実際のレイアウトっていうことなんんですけど、具体的には、通常の訓練であればこれぐらいしか再現しないのに、吹田市の訓練ではこれぐらい再現しているといったような、具体例を挙げて教えていただければと。

吹田市危機管理室

応援機関が来る場所といたしまして、被害認定調査を行うスペースを設けております。

そしてその他にも、相談窓口や臨時の避難所の受付場所といったところを設けている、ということになります。

その他にも、子育て広場とか、避難所のレイアウトというところも展開しております。

記者

避難所っていうのは。

吹田市危機管理室

小学校です。

記者

実際に小学校を使って、避難訓練もされると。

吹田市危機管理室

今回は職員の訓練となっておりますので、避難所の体育館でレイアウトを展開します。

記者

これは実際の小学校かなんかを使ってされるんですか。

吹田市危機管理室

実際の小学校です。

記者

わかりました。ありがとうございます。

記者

私もちょっと訓練に関連して聞きたいんですけども、今おっしゃってくださったような場面で、応援職員、吹田市さん以外の職員が入ってやられるのかなと思うんですけども、これってその受援体制としてやられると思うんですけど、どういう段取りで応援に入ってしまうとか、その辺のシミュレーションをもう少し具体的に教えてくださいますか。

吹田市危機管理室

実際の災害においては他の市からですね、こちら吹田市の方に入ってくるんですけども、GADM と言われる、災害マネジメント総括支援員が入ってくださります。

そういう方が中心となって、どこの避難所の運営を担当するとか、被害人数の調査を把握するとか、といったところを入ってきた方がそれぞれ担当の内容を決めていきます。そのうえで、情報連携の体制、連絡先っていうのを取りまとめていただいて、本部班、本部の運営と連携していくという形になります。

記者

ありがとうございます。

今ご説明くださったのってこの訓練当日の流れでいうとどの辺になりますかね。

吹田市危機管理室

9時から10時15分の間になります。

記者

本部の方でそういう場面が見えるということですか。

吹田市危機管理室

見えます。

記者

それで各班に、そのマネジメント支援員からご指示を受けた応援の方が入っていくような感じですかね。

吹田市危機管理室

そうですね。そういった他機関から来た人たちが、各班のところと連携をしていくような形になります。

記者

ありがとうございます。

あと経過・課題のところで書いてくださっている受援体制っていうのが課題になっているっていうふうなことだと思うんですけども、この能登の話で、輪島市では 300 人の規模を受け入れて、リソースの調整に苦慮というふうに書かれている部分があると思うんですけども、これは応援に行かれた皆さんからの報告であったのか、何かこう、研究機関か何かの指摘で言われていることなのか。

吹田市危機管理室

実際にですね、輪島の方に入らせていただいて、輪島の職員から聞いた話です。

記者

輪島に行かれた吹田市さんの職員が、ということですか。

吹田市危機管理室

そうです。聞いて、見たりしたところですね。

記者

実際に現場支援されて認識されたと。

吹田市危機管理室

そうですね。

記者

それで受援体制が必要だなど。

吹田市危機管理室

はい。

記者

わかりました。ありがとうございます。

吹田市広報課

他にございますでしょうか。

では次に、今回ご説明いたしました案件以外で、ご質問がございましたらお受けいたします。

記者

今ね、企画でちょっと考えていることがあって、今年に入ってですね、北摂各地で結構名所みたいのが次々と誕生しているじゃないですか。

茨木で「ダムパーク」とかね、豊中で「つばさ公園」とかね、結構ベッドタウンって言われていた北摂が、今、観光に力入れているんじゃないかなっていうふうな印象を受けていて、じゃあ吹田はどうなんだって言ったら、万博記念公園があるじゃないかというようなことを言っていて。この前の市長会見の時にもね、これ話題なりましたけど、万博って吹田にある府のもんじゃないかというふうな指摘もあったりとかして、実際じゃあ吹田にその辺りでちょっと観光っていうのをどういうふうな形でこれからやっていくかなとかそういうのが何かあまり見てないので、そこは市長がどういうふうにお考えになっているのかなっていうのを、聞きたかったところがあったんですけど。

後藤市長

まず、ベッドタウンという言い方はもうすでに、長い間してないですね。

昼間人口、夜間人口もほとんど変わりませんし、定着して「暮らす」まちですから。

それから、ますますテレワークが広がっていくと、都市に働きに行って家に帰ってくるっていう、こういうスタイルっていうのは、もうここ10年でガラッと変わっていくと思います。

記者

なるほど。

後藤市長

それから、観光という言葉なんんですけど、全国で観光というのが、もう2、30年前ぐらいか

ら言われ始めて、人を集め、それから良さをアピールする、それを産業につなげる。それは否定するものじゃないですけど果たして吹田にそれがフィットするのかなっていうのは職員も皆それは思っていまして。シティプロモーション推進室もあります。そういうシティプロモーションって、全国にプロモーションをかけて、関係人口のみならずもうとにかく転入者を増やして、人口減少と戦う。これ、吹田市においては全くその戦略は当たりませんで。

記者

そうですよね。

後藤市長

シティプロモーションの定義そのものを、外部に対する魅力の発信ではなくて、吹田市民に対して、吹田市の魅力がどこにあるか、誇りを持ってもらう、シティプライドっていう言い方してますけれども、内部に向けた。これ以上人口増やそうとは思っていませんので、逆にいい環境を守るためにには、これ以上、過大に人口が増えるっていうのは望ましくないと考えてます。

そういう意味で、まあ観光に力を入れてるかと言われますと、正直、力は入れてないです。

記者

そうですよね。そういう印象は僕もありますから。

後藤市長

ただ、公園がやっぱり大きな資源、魅力の資源になってまして、それは市民にとってですね。都市公園の魅力をアップすることで、「ああ、良いまちやな」と感じていただく。その典型が南千里の「バードツリー」なんんですけど。あれで、他の北摂の市長さんとも話してるんですけども、みんな気づいたと。都市公園の中にカフェを作っても良いんやと。あれは、完全な成功事例ですんで、高槻市もそれから豊中市も、始められました。北摂全体の公園の魅力が上がったなっていう気がします。それから、茨木の「おにクリ」ですよね。

記者

そうですね。

後藤市長

あれは非常に目立つんですけども。一つの拠点を作られたなっていう。吹田市は分散型です。そこまで規模は大きくないですけれども、各ブロックに、そういう

公共施設であるとかコミュニティー施設であるとか、今度、北千里でも今取り組んでますけれども、北千里、南千里それから健都もそうですけれども、分散型で魅力をアップしていってる。だから、一つの核でここに、ここを見てくれっていうまちづくりはしてない。それをご理解いただきたいなと思います。

記者

ただ、万博をどういうふうに見るかっていうのは、ちょっと気になってはいるんですけど。

後藤市長

大阪府さんと、もともと財務省ですけれども。

どう見たってやっぱ吹田市の財産なんんですけど、我々、北摂や大阪、いや関西の財産やと思ってまして。

記者

なるほど。

後藤市長

少なくとも吹田が持ち主だとは、全然思ってないです。

記者

なるほど。

後藤市長

それと、万博公園内の管理とか企画とかいうのは、治外法権と言う言い過ぎですけど、うちの管理下にないもんで。

記者

そうですよね。

後藤市長

はい。

記者

でもね、今回すいたフェスタとか、吹田クロス万博とかっていう形で吹田のイベントを万博記念公園でもやってるじゃないですか。

後藤市長

はい。

記者

そういったところでも一応連携が取れているのかなというふうな印象もあったんですけど、そのあたりいかがですか。

後藤市長

十分活用させてもらってると思います。

ただ、来られる方は、行政間の守備範囲とか、そういうことは意識されませんから。

大阪の万博記念公園、北摂の万博記念公園、吹田の太陽の塔みたいな。

そこはいちいち言わなくていいかなという。

歴史がありますから、トータルで魅力が発信できてるなと思います。

記者

ありがとうございます。

記者

先日、いじめの重大事態をめぐるですね、上告の申し立てが不受理になって、市の敗訴が確定したわけなんですけれども。

そのことについての、今日は教育委員会いらっしゃらないんですけど、市長の受け止めといいますか、どういうふうに受け止めていらっしゃるか、お聞きできればと思うんですけれども。

後藤市長

一部分について敗訴した。

そういう意味では、非常に残念やと思ってます。

全体としては、本市の主張するところ、言い分っていうのは認められたなという考えです。

記者

一方、その敗訴を受けて認められた部分も含めてですね、今回の事案で学校や市教委の対応に、どの辺の部分に問題があったのかっていう認識は、あるんでしょうか。

後藤市長

ここまで具体的になりますと、また教育委員会から説明させますんで。

記者

となると、市長としてこの敗訴を受けてですね、市としてどういうふうな改善策みたいなものを取っていくか、お考えっていうのはあるんでしょうか。

後藤市長

違法とされた部分については適切に対応します。

全部が否定されたわけではありませんから。

記者

今後のその対策としてですね、被害児童側の方を取材しますと、いじめ予防プログラムっていうのに対して、すごく力を入れてらっしゃるっていうのは私も認識はしてるんですけども、実際に発生している事案への対処っていうものに対して、もっと優先的に対応して欲しいっていうふうに意向を聞きました。

そのうえで例えば、いじめの対応の実効性を高めるために、そういった重大事態が起きた学校にはですね、教員を加配するとか、何か具体的な措置ですかね、その重大事態に対しての学校へ向けての措置っていうのは何か、市長の考えはありますでしょうか。

後藤市長

基本的に教育委員会の対応だと思ってます。

そのうえで、まっすぐな答えになるかどうかわかりませんけども、根っこは、今の義務教育の課題だと思ってます。教員の不足。吹田市は教員採用する権限ありませんから。大阪府が採用した教員をこちらに配置していただいていると。

吹田市独自で吹田の子供たちに見合った教員を採用したいっていうのは前から思ってるんですけども、それが平均的な教員がこられた場合に、一部、その事案に対して十分対応できてるんかっていうのは、行政側から見ててちょっと課題やなと思っています。

それと教員そのものが、受験生はもう不足しています。3倍を切ってますから。その時に、講師で補完せざるをえない。それは3倍をくぐり抜けられなかった方が講師ですから。

昔の20倍30倍の時と、教員そのものも厳しい状況になってるっていうのは教育委員会から聞いてます。

一方で、保護者の意識っていうのが非常に高まってきてます。そのプラスマイナスがあります。

それからいじめに関する認識も大きく変わってきます。

例えば、あだ名で読んではいけないとかいうのも一例ですけれども、我々が子供の頃と全く状況が変わってきたている。

そういう総合的な教育環境がベースにあって、今回の事案も起こった面もあると。

そういう意味では、総合的に教育環境を改善せないかん、っていうのは思ってまして。

文部科学省とも、大阪府とも協議を重ねているところです。

ただ、一朝一夕で何とかなりませんので、教育委員会だけの問題というスタンスではありません。行政と一緒にになってやっていくと。

そこは、他市とはちょっと違うところかなという気はします。

記者

それといじめの重大事態が起きますと、今、市長も参加されています総合教育会議等ですね、第三者委員会提言を受けて、市の取り組みであったりみたいなものを議論する自治体も、箕面市なんかはされているんですけども、吹田市の議事録を見る限り、今6例、7例、重大事態がある中で、それについて、市から提言について議論した形跡がないように見受けられるんですけど、何かその理由があるのですか。

後藤市長

それは総合教育会議だからです。

総合的に、教育問題を行政と教育委員会が議論する場ですんで、個別の事案に対しては、教育委員会が責任を持って対応します。

それがもしできない、不十分な環境があるんであれば、行政がそこに入って、人員のこと、予算のことも含めて一緒にになって対応しましょう。

それが総合教育会議の趣旨ですんで、個別の事案に対して、重大事案に対して、どう解決していくのかという議論は、もとよりやっておりませんので、その趣旨はご理解いただきたいと思います。

記者

解決したというより解決した後の話なんですけれども議題として取り上げるってことはないですか。この案件について反省点があるか。

後藤市長

ケースバイケースなんで、そういう、色々な事案が起こるベースに何があるのかっていう議論は十分やってます。

先ほど言いましたような、教員の問題、働き方の問題、それから社会動向、これに合わせた教育のあり方はどうあるべきか、という議論は十分にやっておりますんで。

記者

もう少しあと 2問ぐらいなんんですけど、他のいじめの重大事態になっている事案の保護者についても取材をしてるんですけど。

昨年取りまとめた報告書ですね、事実誤認が多数あるとして、再調査を求める要望書を市

長宛に出してですね、市議会の議員の質問でもですね、取り上げられた事案なんですねけれども、一応半年かけて回答は再調査しないというものでした。

その再調査しない理由についてですね、もう少し具体的に知りたいということで市長宛に質問を出しているようですねけれども、まだ具体的に回答がないと。

市長で、この質問に対してですね、なぜ再調査しないのかっていうことに対して責任者として回答する予定、意向というのはあるんでしょうか。

後藤市長

先ほど言いましたように、それを突き放してはなくて、教育委員会の責任に関して、それを乗り越えて吹田市、行政側が、市長がコメントを出すなりアクションを起こすっていうことは、避けるべきだと思ってます。

教育委員会の責任において解決をして欲しい。

そういう意味で、こちらからコメントは出してません。

記者

ただ責任者は市長だからこそ市長宛に要望書を出してるんですけど、保護者として教育長ではなくて。今回の重大事態に関してはですね。

後藤市長

教育委員会からしっかり答えてもらいたいと思っています。

記者

この事案で言いますと、保護者がずっと求めている担任の教員であるとか、校長からの直接謝罪というものが、3年経ってもですね実現されていない現状があってですね。

市教委からは、校長のみが対応するということで、平行線が続いています。

で、これは個人的にはなってしまうんですけども、いじめの被害者に寄り添う姿勢を見せるのであれば、当時の担任であるとかから直接謝罪の場を設けるっていうことぐらいは、叶えてあげてもいいのかなあと思うんですけども。市長そのへんどのようにお考えですか。

後藤市長

いやそれはもう教育委員会ですね。詳細、経緯から現状の詳細。

双方からのヒアリングなり調査をしないうえで、コメントを出すのは適切ではないと思っています。私はその立場です。

記者

双方というのはどの双方ですか。

後藤市長

いじめであれば、加害者と被害者ですね。

それから教員もそうですし、教育委員会もそうですし。私、調査をする立場にはありませんので、調査機関は教育委員会がしっかりと設けてますんで。その報告は受けてますけれども。何度もになりますけども、そういう問題が今後起こらないように、何か欠けているところは、教育のあり方そのものを、直すべきなのか、何かを補強すべきなのか。

それとも、前から言ってますけど、教育人事権を吹田市に移譲することによって、教育環境が強化される。そういうことも、これまでずっと主張をしてきました、「総合的に対応してまいりたい」と。そういう意味で個別の対応はしていないってことです。

記者

そうするとそういう再調査を持ってくれとかそういう要望、主張は、教育長に出すべきだっていうお考えですか。

後藤市長

教育長です。

記者

ありがとうございました。

吹田市広報課

他にご質問ございますでしょうか。

記者

特区民泊に関してですね、大阪府の方から保健所設置市に対して、意向調査が出ていると思うんですけど、吹田市さんはないかなと思うんですけど、状況を教えていただきたいです。

春藤副市長

まだ届いたところのようなので、まだ報告を受けてませんので。申し訳ないです。

記者

そうですか。回答が今月の 28 日までとかだと思うんですが。

後藤市長

(行政経営部長に対し) 何を聞かれてるの。

行政経営部長

引き続き、特区民泊、今、吹田市は対象外なんですけど、多分それが変わってないかってい
うか、改めて何か検討してるかっていうようなことを聞かれているんだと思います。

記者

もし何かあれば。

市長

もとより意思決定はしますから。

記者

この自由記載とかで、市としての立場とかコメントとか書かれるケースもあったりとかす
るんですけど、何かちょっとコメントがありますか。

後藤市長

当初、その話があった時に内部で検討して、「うちはないよね」っていうシンプルな結論を
出しましたんで。「何々してもらったら、特区民泊に手をあげます」とかそれ一切ないんで、
非常にシンプルな答えになります。

記者

とりわけこういうことがあるんで、絶対やりませんとか、なんかそういう特別な思いとかで
すね、そういう市として何か発信されがあれば。

後藤市長

特区以前に民泊そのものに対して、前向きではないんで。「民泊って何」っていう。「うちは
関係ないよね」っていうそういうスタンスですんで。特区であるかどうかっていうのは関係
ないですね。ちょっと愛想ないですけど。

記者

大丈夫です。とりあえず色々な人たちにお伺いしてるんですけど。

もう1点ちょっと別テーマでよろしいですか。

ミニストップの期限不適切表示問題で、やはりちょっと保健所設置市として、こういう調査
されてることとか、申し出があったりとか、それに対して市長としてコメントされることが
ありましたら。

春藤副市長

調査には入っています。

同じように、市内の店舗には、健康医療部の方で調査には入っていますっていう報告は受けていますけど、その結果までは受けていません。

記者

具体に何店舗とか、どこか明らかにするケースもありますけど。

春藤副市長

多分4店舗だったと思います。

健康医療部長

細かい部分はちょっとなかなか申し上げにくいところがありますけど、今、申し上げましたように、実際に該当するところに、調査に入らせていただいているというところぐらいで。

記者

わかりました。

あと直近で言うと、道頓堀で大きな火災がありました。法令違反とかもあったみたいでけども、ちょっと消防の方でまた調査されたりとか、対策に動かれているとか、そういうふうな話があればと思うんですけど。

後藤市長

うちの消防も、その防火施設がどうなってるかって、定期的に立ち入りはしてるんですけども。

あのニュースを見てて思ったのは、桁違いにその対象が多い大阪市で、十分な消防職員が配置されてるのかっていう。

それはコメントの中でも出てましたけど、とても回りきれないっていう。数も桁が違いますから。吹田市でも定期的に回って、非常ドアの前に物が置いてないか、置いてたら注意して、もう1回行って、除けたか（確認して）、かなり地道な、防火管理措置を講じてますので、相当な人手が要ると思います。その点、大阪市さんはしんどかったんやろなっていうのは、消防関係者からも聞いてます。

記者

ありがとうございます。

記者

万博なんですけども、今回、関西で2回目の万博っていう中で言えばですね。

最初の 70 年万博っていうのはすごい歴史的なというかですね、ものすごい社会にも、インパクトを残したこの吹田での万博っていうものの影が余りにもちょっと薄いのかなっていう個人的な印象ですね。こちらの方との連携であったり、70 年万博のレガシーというかですね、そういう遺産なんかとかで、歴史的になるっていうのは、あまりこう、表に出てこないというか受け継がれてないような印象を受けるんですけど。

そのあたり、吹田の市長さんとして何かお感じになっていることがあれば、ちょっとお伺いしたいなど。

後藤市長

簡単に言えば残念です。私も 70 年万博世代ですから。

この同じ都道府県内で 2 度あるって、多分もうないんでしょう。

それが全く連携できてない。それを結構こちらからも申し入れをしました。

ダブルの会場で、サテライト会場でっていう。

55 年の年月の経緯っていうのを、吹田で見てもらって、それで今の最新の、展示・博覧会を夢洲で見てもらうと。ダブルの会場でって。それと、もっと前にこれは誰かが言ってたんですけど、「もう 1 回やったらええやん」っていうありましたよね。交通機関はちゃんと揃ってるし。

そういう色々な声はあって、会場だけじゃなくて、記憶も含めて、歴史も含めて、両者がお互い一つとは言わんでも、両方（の万博）とも見に来る、来られる方って多分日帰りでは来られないんで、外部・インバウンドの場合、何泊かされるときに、必ずこの記念公園に行く。いや別に吹田の万博と言う気はないんですけど、記念公園に行って、あーそうなのかなっていう、私はそういうイメージだったんですけど。

それは協会には何度もお伝えはしています。推進局にもそうなんですかけども、とても時間的余裕も無くてってという答えやったんですけど。

記者

時間的余裕が無いっていうのは協会側の回答というか、釈明ですか。

後藤市長

非公式ですけれども。

記者

協会の方には何か文面とか、出したやつはあるんですか。

後藤市長

出してないです。

記者

口頭で聞かれたということですか。

後藤市長

立ち話です。どうですかっていう。

記者

なるほど。

後藤市長

ですので、我々は開催地として、非常に小規模ですけれども、平和シンポジウムっていうのを、先般やらせていただきました。

記者

ちょっと話が戻るんですけど、このクロス万博っていうのについては、クロス万博っていう名称を使うのは協会から許可とか、連携したりとかはされているんでしょうか。

吹田市シティプロモーション推進室

万博っていう言葉自体が、一般名称化されているもので、特段そういったものではございません。

記者

万博の協会と連携してるとかそういうことではないんですか。

吹田市シティプロモーション推進室

吹田が70年万博の開催地っていうところもありますので、何かその時に吹田をもう一度発信しましょうということで、こういったイベントをさせていただいているものでございますので、連携するとかというのではなく、我々の魅力発信というところでさせていただいているものです。

記者

ありがとうございます。

記者

少し前の話になるんですけど、参院選を終えてですね、市長自身、参院選の時、どのような応援活動をしていたか、私が不勉強で申し訳ないんですが、知らないんですけども。

結果も踏まえて、少数与党が続く中、また新生、新しい党が拡大しているとかいろんな現象が出ましたけれども、市長として、どのように参院選を見られたのかというのをちょっとお聞きできればと思うんですけども。

後藤市長

初めに、私無所属ですので、行政のトップとして、参院選には一切関わっておりません。皆さんと同じ、職員と同じで新聞を見て、テレビを見て、うん、大体予想通りやったなという気はします。

記者

あと、短くですけど、3度目の都構想の話が出てますけれども、近隣の都市としてどのように見てらっしゃるのかっていうのはありますか。

後藤市長

何かあの副首都と都構想と、ちょっと私もよくわからないんですけど。
もう1回チャレンジされるとすれば、今度どんな形にするかによるんですよね。
同じものを出すっていうのはないとは思うんですけども。
大阪府民がどう判断するか。我々も含めて、そこだと思います。

記者

ありがとうございます。

吹田市広報課

以上をもちまして、令和7年9月定例記者会見を終了いたします。
本日はありがとうございました。